宮沢賢治作品の幻想性の由来 ――その方法論と体験特性

浜垣　誠司

Ⅰ「心象スケッチ」の世界観とその実践

(1) 賢治は詩も童話も「心象スケッチ」

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
紙と鉱質インクをつらね
（すべてわたくしと明滅し
　みんなが同時に感ずるもの）
ここまでたもちつゞけられた
かげとひかりのひとくさりづつ
そのとほりの心象スケッチです

（『春と修羅』「序」より）

この童話集の一列は実に作者の心象スケッチの一部である。〔中略〕
これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつやゝかな果実や、青い蔬菜と一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。

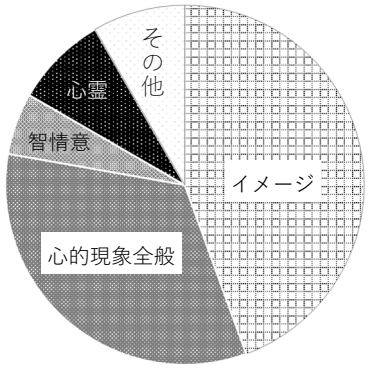
（『注文の多い料理店』広告文より）

(2) 明治大正期における「心象」の意味

○ 明治・大正時代に出版され、書名または目次に「心象」の語を含む書籍を、国会図書館デジタルコレクションで検索すると78件が該当し、このうち二〇一九年一一月時点で内容がインターネット公開されているものは、同一書籍の改訂版等を除くと36件あった

➢ この36の書籍における「心象」の意味を分類すると、左のようになり、「イメージ」と「心的現象全般」という二つの意味が主流であった

意味	件数
イメージ	16
心的現象全般	12
智情意	2
心霊	3
その他	3
計	36



➢ 右項目のうち「智情意」は、「心的現象全般」に含めることもできよう

【表】明治大正期の書籍における「心象」の意味

書名	著者・訳者	出版年	「心象」の意味
可吉士氏心象學摘譯	西村茂樹 訳	明治年間	心的現象全般
心理學	澤柳政太郎	18--	イメージ
心理学：通信教授 第1	井上円了	1886	心的現象全般
心理摘要	井上円了	1887	心的現象全般
社会学	三宅雪嶺(雄二郎) 訳	1888	心的現象全般
心理学百問百答	日下部三之介	1893	心的現象全般
妖怪学講義 巻5 心理学部門	井上円了	1894	心的現象全般
実験心理学(麟氏) 上巻	田中治六・三石寅吉	1895	イメージ
教育学ニ応用シタル心理学	浮田和民 訳	1900	イメージ
教育の基礎としての心理学	富永岩太郎・佐佐木吉三郎	1900	イメージ
催眠術及感応療法	山崎増造	1903	心的現象全般
新心理学：教育応用	斎藤鹿三郎	1903	イメージ
心理学教科書	福来友吉	1905	イメージ
倶舎哲学	舟橋水哉	1906	心的現象全般
心理学講義	福来友吉	1907	イメージ
心の研究	加藤咄堂	1908	心的現象全般
心身強健之秘訣：実験修養	藤田霊斎	1908	智情意
実験心理学講義	野上俊夫・上野陽一	1909	イメージ
心象及び其の実験	渋江保 訳編	1909	心霊
道案内	沢田純一	1909	覚悟
心理学	大槻快尊	1909	イメージ
ロイス氏 心理学	風見謙次郎 訳	1910	イメージ
心霊の秘密	平田元吉	1912	心霊
最新心理学講義	伊賀駒吉郎	1913	イメージ
修養的婦人の心理	高賀詵三郎	1915	智情意
浄土宗在家勤行式講話	中村是隆	1917	こゝろもち
心理学要領 4版	上野陽一	1918	イメージ
現在及将来の心霊研究	日本心霊学会 編	1918	心的現象全般
人及事業能率之心理	上野陽一	1919	イメージ
自己の改造	秦正堂	1920	心的現象全般
法悦に生くる日	藤井巌	1922	こころがけ
音楽の思想と法則	田坂晋三郎 訳	1924	イメージ
心理学新論	伊賀駒吉郎	1925	イメージ
学校児童心理学	関寛之	1925	イメージ
国民と信仰	庄野富堂	1925	心的現象全般
人生学	内ケ崎作三郎	1926	心霊

○「イメージ」の意味で使用されている例は左のようなものであり、特に心理学の専門書籍において、現在の「心像」と同様に使われている。

六　心象及表象　Image and idea Gebild and Vorstellung.

一、心象。Image Gebild 精神現象は、種々複雑なる結合狀態にして、その内にて比較的簡單なる結合をなせるものあり、此を心象と稱す。此等の心象は分析すれば精神要素に分析せらるゝも、各其結合よりなる性質を研究せざるべからず。已に言へるが如く心象

（大槻快尊『心理学』一九〇九より）

第六章　感性

(ろ)　心象

五七、心的感性の分野は感官の現在與奮に原づく精神生活の方面のみならず、一切復合意識狀態に必隨する心象の方面をも包含す。心象(Image)とは一般に過去の五官與奮の間接的結果なり。此點よりいふときは、心象

（風見謙次郎訳『ロイス氏　心理学』一九一〇より）

(3)　宮沢賢治の用いた「心象」の意味

○宮沢賢治の「心象」も、右の例と同様に、「イメージ」という意味と考えられる

理由一、賢治自身が作品中で「心象」に「イメーヂ」のルビを振っている例がある

この県道のたそがれに
あゝ心象（イメーヂ）の高清は
しづかな磁製の感じにかはる

（「〔高原の空線はなだらに暗く〕」より）

理由二、「心象」が用いられているいずれの作品においても、「心的現象全般」や「心霊」の意味ではなく、心に映じている何らかの「像」を指している

心象のはいいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんの諂曲模様

（「春と修羅」より）

すなわち、賢治が言う「心象スケッチ」とは、彼自身の「イメージ描写」なのである

(4) 賢治の「心象」と心理学的「イメージ」との相違

○ ただ、心理学的な意味での「イメージ」の場合は、通常は外界の直接的知覚像や、錯視や幻覚のように、本人の意図を離れて受動的に体験されるものは除外するが、賢治の言う「心象」は、これらをいずれも含み、己の心の中に映ずるすべての「像」のことであった

➢ 賢治はこの「心象」という概念装置のもと、内的表象と外的現実（主観と客観）を区別せず、いずれも「こゝろのひとつの風物」として同列に扱った

これらについて人や銀河や修羅や海胆は
宇宙塵をたべ、または空気や塩水を呼吸しながら
それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが
それらも畢竟こゝろのひとつの風物です
たゞたしかに記録されたこれらのけしきは
記録されたそのとほりのこのけしきで
それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで
ある程度まではみんなに共通いたします
（すべてがわたくしの中のみんなであるやうに
　みんなのおのおののなかのすべてですから）
〔中略〕
けだしわれわれがわれわれの感官や
風景や人物をかんずるやうに
そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに
記録や歴史、あるひは地史といふものも
それのいろいろの論料といつしよに
（因果の時空的制約のもとに）
われわれがかんじてゐるのに過ぎません

（『春と修羅』「序」より）

ぼくたちはぼくたちのからだだって考だって天の川だって汽車だってたゞさう感じてゐるのなんだから、そらごらん、ぼくといっしょにすこしこゝろもちをしづかにしてごらん。

（「銀河鉄道の夜」初期形三より）

➢ このように「主･客」未分化な賢治の「心象」は、フッサールの「純粋現象」、ベルクソンの「イマージュ」、西田幾多郎の「純粋経験」にも通ずる

○ 賢治はこのような世界観を、仏教の「唯識」、すなわち「あらゆる存在はただ心における認識現象にすぎない」という思想から学んだと思われ、学生時代の書簡にもしばしば記している

戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候　その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性に御座候

（宮沢政次郎あて書簡 46 より）

退学も戦死もなんだ　みんな自分の中の現象ではないか　保阪嘉内もシベリヤもみんな自分ではないか　あゝ至心に帰命し奉る妙法蓮華経　世間皆是虚仮仏只真

（保阪嘉内あて書簡 49 より）

➢ 末尾の漢文は、「世間虚仮、唯仏是真（世間は虚仮（こけ）なり、唯仏のみ是れ真（まこと）なり）」という聖徳太子が遺したと伝えられる言葉に由来

石丸博士も保阪さんもみな私のなかに明滅する。みんなみんな私の中に事件が起る。

（保阪嘉内あて書簡 153 より）

➢ 賢治は「心象」の描写として、「明滅」あるいは「ひかりとかげ」という表現をよく用いたが、これも唯識の「刹那滅」という思想に基づいていると思われる

(5) 「心象スケッチ」という実践行為とその結果

○ 「自己の外部に客観的実在なるものが存在する」という常識的前提を棄却し、すべては「わたくし」の意識現象であるという世界観を選択するということは、フッサールの「現象学的還元」にも相当する行為である

自然的態度を採るときわれわれは、世界がわれわれにとって現にそこに存在するようになるゆえんのあらゆる作用を、無造作に遂行する。われわれは素朴に知覚作用や経験作用のうちで生きる。知覚作用や経験作用は、顕在的な定立作用であって、こうした作用のうちで、われわれに、事物統一やあらゆる種類の実在が現出してくる。しかも、それらはただ単に現出してくるのではなくて、「手の届く向こうに存在する」とか「現実的な」といった性格において与えられてくるのである。〔中略〕

ところが、現象学的態度を採るときわれわれは、原理的普遍性において、右のようなコギタチオ的な一切の定立の遂行を、阻止するのである。すなわち、これまで遂行されてきたその定立を、「われわれは括弧に入れる」。新しい研究のために、「われわれはこうした定立に参加しない」。定立のうちで生きることをやめ、定立を遂行するのをやめ、その代わりにわれわれは、定立の方に向けられた反省作用を遂行するのである。そしてこの反省によってわれわれは、定立そのものを、それがそれである絶対的存在のありさまで把握するのである。しかもそれと一緒に、その定立の中でまた定立自身の存在と不可分の形で思向されているもの、例えば経験される当のものそのものであるようなすべてのものをも、把握するのである。われわれは今や、全面的に、こうした第二段階の作用の中で生きるのである。

（フッサール『イデーンⅠ』より）

○ すなわち賢治は、「心象スケッチ」という創作的実践行為において、

① 心理的には、外的現実も内的表象も「みな均しき一心の現象」であるとして世界を観じつつ（＝一貫して現象学的還元の中で生きつつ）、

② 身体的には、手帳とシャープペンシルを手に、しばしば夜を徹して野山を歩き続け、降り注ぐ感覚のシャワーと、湧き起こる表象や感情の嵐を、取り混ぜて実況中継のように記録していった

○ ①は、賢治にとって結果的に、現実と空想の境界を攪乱し、彼の「空想傾向（fantasy pronenes）」を、促進することになったのではないか

➢ 現実と空想の区別の曖昧さは、空想傾向の重要な特徴

11) 自分の空想の多くは、現実のような鮮やかさ（リアリティ）をもっている。
13) 空想したことを現実にあったことと混同することがしばしばある。

（空想傾向の評価尺度 CEQ-J より）

○ ②は、身体を限界状況に追い込んで神秘体験を求める宗教的修行にも、通ずる面があったのではないか

➢ たとえば、比叡山延暦寺における「常行三昧」の修行では、阿弥陀如来を心に念じその名号を唱えつつ如来像の周囲を何日も回り続けるが、その最中にしばしば十方の仏が眼前に現れて立つ姿が見えるため、「仏立三昧」とも呼ばれる

➢ 比叡の山中を歩き続ける「回峰行」の際にも、行者は様々な神秘的体験をした

➢ インドで唯識説を主唱した「瑜伽行唯識派」においても、その名前のように、唯識という世界観と、ヨーガ等の身体的実践が、表裏一体のものとして行われた

○ なぜ賢治は、わざわざこのような特殊な創作方法をとったのか？

➢ 賢治が神秘体験の宗教的意義を格別に重視していたことを示す、親戚の証言

私（注：賢治の親戚の関徳也）が二十三歳の大正十一年の秋、法華経寿量品の「一心に仏を見奉らんと欲して自ら身命を惜まず、時に我及び衆僧俱に霊鷲山に出づ」と云ふ聖句の通り、肉眼を以て仏を拝みたいと熱意し、岩手山中に入つたことがあります。身命を惜まず、と云へばまづ身命を捨ることだと思ひ、身体は食物で維持するものだから、その食を断つて一心に仏を念じました。その間約十五日、細るばかりの身を持つて仏を念じてゐたら、或日仏が降り給ひ、私にありありとその姿を見せて下さいました。私は感激して、なほ仏を念じてゐますと、数限りない仏達は、私の周囲いつぱいに降り立たせ給ひ、私は深く感動しました。その時を期して私は人生といふものに対する考へ方が一変し、法華経の教へる娑婆即寂光土といふことは間違ひないことだと信じました。

それから人生の一切が愉快になり、丈余の積雪の岩手山を里へ下りました。

賢治へその事を報告しますと、賢治は真剣な面持ちで大変喜ばれ、「さういふ事は昔の豪い和尚などがよく体験されたことです。その時、仏は貴方に何かをたのみませんでしたか。」と云ひました。私は「何もたのまれない。」と云ふと賢治は少し落胆した様子で後は唯「ハア」と言つたきりでした。私も何だか拍子がぬけて、かへす言葉もありませんでしたが、仏から何か委嘱される様な本当に力のある男であればよかつたなあと、口惜しく思ひました。

（関登久也『宮澤賢治素描』より）

➢ 関徳也は三歳年上の賢治を兄のように慕い、賢治の影響で短歌を始め法華経を信仰し国柱会にも一緒に入会するなど、行動の手本としていた

➢ 賢治の「心象スケッチ」開始は大正十一年一月で、右の逸話に少し先行するが、賢治の心中にも右記と同じような神秘体験への希求があったのではないか

以上のようにして行う「心象スケッチ」という心理的・身体的実践の積み重ねが、賢治の作品に特徴的な幻想性を生み出していった面があるのではないか

Ⅱ 宮沢賢治の体験特性―「境界の薄さ」と解離体験

(1) 共感性と催眠感受性の高さ＝自我境界の薄さ

○ 賢治は幼少期から、他人の痛みを自分の痛みとして感じずにはおれない傾向があった（＝共感性の高さ）

あるとき、いたずら生徒がろうかに立たされ、罰として水をたたえたお茶碗を持たされていた。賢治はそれがかわいそうでならない。いいぐあいに先生の用で教員室へいくことになったので、ろうかへ出るとあっというまにその水をゴクゴクのんでしまい、「ひどいだろう。たいへんだろう」と同情した。〔中略〕

みんなで車屋の前の道路でバッタ（メンコ）をして遊んでいたときのことである。バッタバッタとメンコを叩いているうちに、その一枚がとびはねたのをあわてて追っかけた子がある。そこへ運わるく荷馬車がきた。のばした子どもの手をグザッとわだちがひいた。アッという悲鳴。血がポタポタ流れでる。賢治はむちゅうになってかけより、「いたかべ、いたかべ」といいながら、その傷ついた血と泥の指をむちゅうで吸っていた。　（堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』より）

➢ 右のような咄嗟の反応は、身に付けた道徳心というよりも、理屈以前の生来の感性と思われる

○ 賢治は中学時代に「静座法」の指導を受けた際に、開始40分で全身の筋肉が勝手に動き出すという体験をした（＝催眠感受性の高さ）

又今夜佐々木電眼氏をとひ明日より一円を出して静座法指導の約束を得て帰り申し候　佐々木氏は島津（ママ）大等師あたりとも交際致しずいぶん確実なる人物にて候。静座と称するもの〻極妙は仏教の最後の目的とも一致するものなりと説かれ小生も聞き囓り読みかじりの仏教を以て大に横やりを入れ申し候へどもいかにも真理なるやう存じ申し候。（御笑ひ下さるな）もし今日実見候やうの静座を小生が今度の冬休み迄になし得るやうになり候はゞ必ずや皆様を益する一円二円のことにてはこれなしと存じ候　小生の筋骨もし鉄よりも堅く疾病もなく煩悶もなく候はゞ下手くさく体操などをするよりよっぽどの親孝行と存じ申し候

（宮沢政次郎あて書簡６より）

謹啓　昨日の手紙の通り本日電眼氏の指導の下に静座仕り候ところ四十分にて全身の筋肉の自動的活動を来し今後二ヶ月もたゝば充分卒業冬休みに御指導申す決して難事ならずと存じ候まづは御報知まで　草々　敬具

（宮沢政次郎あて書簡７）

静座法の佐々木電眼という人は中学校寄宿舎附近に住居して、独特の方法で静座法を教えていた人で、島地氏や色々の人々とも昵懇であったようである。眼光炯々とした、あまり背の高くない精力的な一種の催眠術師であったと私は思っている。

賢治は前の手紙とこの葉書にも書いたようにこの佐々木氏の指導で静座法を何ヵ月か習った。そして冬休みにこの人を連れて家に帰ったが、父や姉にも静座法をすすめたことを私は思い出すのである。

電眼の暗示に誘導されて、姉のとしは見るまに催眠状態になったが、父は電眼が長い時間汗を流して懸命に努力したのであったが、いつまで経っても平気で笑っていたので、遂に電眼はあきらめて、雑煮餅を十数杯平らげて、山猫博士のように退散したのであった。

（宮沢清六「十一月三日の手紙」より）

➢ この「静座法」は、明治末〜大正初期に全国的に流行した「岡田式静座法」と推定される（最盛期には、東京の百数十か所で「静座会」が開かれていた）

◆ 実際に当時、「岡田式静座法」を行うと身体が動揺し始める人々が多かった

▲動揺の種々

此の身體の動揺には、色々種類がある。手を動かす人もあれば、頭を動かす人もある。肩を動かす人もあれば、腰を動かす人もある。頭の運動にも、或は前後に或は左右に、種々の運動がある。手の運動にも、その通りで、縦に振るものもあれば、横に振るものもあるが、握り合せた儘の兩の手で、下腹をポンポンと打つのが、最も普通の形である。或は端座の儘で、にじり廻る人もあれば、ピョンピョンと飛び廻る人もある。懸け聲を懸けて叫ぶ人もあれば、又妙な聲を出して唸る人もある。其れも三十分なり一時間の間、同じ運動を反復する人もあれば、運動を種々様々に變更する人もある。忽ち静かに、忽ち騒がしく、いまは石地蔵の如く、次には夜叉の如く、千態萬状の動揺を演ずるは、是れ實に静坐會の實況である。

（岸本能武太『岡田式静坐三年』より）

◆ この身体の動揺は医学的には、「心理自動症（psychomotor automatism）」と考えられ、自動書記などと同様の自己催眠現象である

➢ 通常は、「岡田式静座法」を始めてからどの程度の時間で、身体の動揺が出現するのか？

元來、身體の動揺は静坐の目的ではない。静坐中人によつて自然的に伴生する現象である。故に、動揺が起つても、喜嬉するにも當らなければ、又た動揺が起らないからといつて、必ずしも心配する必要もない。動揺の起る起らぬは全然意に介しないが可い。

現に親しく岡田氏の指導を受けて、熱心に静坐を行つて居る人々の中にも、身體動揺の現象は、二三日にして起つた人もあれば、既に三年餘も熱心に行つて居ても些しも起らない人もある。故を以て早く動揺の起つた人は早く堂奥に入り、數年後の今日も未だ動揺の起らない人は未だ静坐の堂奥に入つて居ないのかといふと、必ずしも然うではない。二三日にして動揺の現象があつても、未だ堂に入つて居ないものもあれば、三年五年經つても動揺しなくても妙境に達して居るものもある。

（荒井倉三郎『實験　岡田式静坐法』より）

◆ すなわち、「二三日にして起つた」から「三年餘も起らない」までの幅があるが、初日に「四十分」で起こった賢治は、相当に早い方だと思われる

➢ つまり、賢治の催眠感受性は、一般人より相当に高かったのではないかと推測される

○ 「共感性が高い」ことと「催眠感受性が高い」ことは、いずれも「他者からの影響を受けて、自我が容易に反応してしまう」ということにおいて共通している

➢ ここで、「自我境界」という説明概念を用いれば、右の特徴は**「自我境界が薄い」**と表現することができる

○ 解離傾向は催眠感受性とよく相関することがわかっており、賢治の**解離傾向も高かった**可能性がある

(2) フェダーンの自我境界とその模式図

○ 「自我境界（ego boundary）」とは、フロイトの最古参の弟子の一人で、自我心理学を確立したフェダーン（Federn, Paul）が、その理論の中心概念の一つとして提唱したもので、自我と、それ以外の部分（＝非自我）との「境界」を指す

➢ 「非自我」は、外界（外的現実）と、内界（無意識）から成る

➢ フロイトが自我の「機能」を重視したのに対して、フェダーンはフッサールの現象学の影響も受けつつ、自我というものを「主観的体験（*Erlebnis*）」としてとらえたのが特徴である

「自我境界」という語についてよく言われる意見について、ここで論じておく。ある高名な論者が、この語は硬直した線や帯のような、あるいは溝のような、一つの領域の輪郭を指しているように感じられるということで、この概念は受け入れがたいと述べた。私からすると、この論者は心的過程に対する静的な理解にとらわれすぎている。「自我境界」の代わりに「自我外縁」と呼んだ方がよいという彼の示唆は傾聴に値するが、いずれにせよこれらの語は、自我の周囲に帯状あるいは線状の明確な区分があるということを言おうとしているのではない。そのような区分は、流入しあるいは分離する諸要素による、変化する統一体としての自我そのもの性質に、反するものである。自我は、その内容の統一性の感覚が及ぶ限り広がっていると、現に感覚されるが、この事実を表現するために、「境界」または「外縁」という語を用いる必要があるのである。この感覚こそが、ある生の瞬間において自我に所属する全てを、自我に含まれない他の全ての心的要素や複合体から、明確に区別する。統一性の感覚が存在するから、その統一体の境界あるいは際限もまた、存在するのである。これは、単なる現象学的な事実認定にすぎない。

（P・フェダーン『自我心理学と精神病』より）

○ フェダーンは、外界と自我との間の境界を「外的自我境界」、内界（無意識）と自我との間の境界を「内的自我境界」と呼んだ

➢ 外的自我境界を通して自我にもたらされる対象には、自我境界において「現実感」の感覚が付与され、「外的現実」として体験される

➢ フェダーンは、この際に自我境界は、一種の末梢感覚器官のような機能も果たしていると考えた

➢ 健康な状態では、無意識（イド）にある対象は直接に内的自我境界を通して自我に到達することはなく、前意識を経由し、内的自我境界において「自我感情」が付与されて自我化（egotization）される

○ 健康な自我境界は、動的で柔軟性に富み、拡大や収縮をする

➢ フェダーンの時代には、まだ細胞生理学は十分に発展していなかったが、現代から見るとこのような自我境界の動態は、「細胞膜」が一個の細胞の独立した統一性を保ちつつ、外部との間で、物質・エネルギー・情報を動的に交換しながら己を維持している様子と似ている（個人的には「自我膜」と呼びたい）

○ フェダーンはいくつかの精神症状を、自我境界への病的な変化として説明した

➢ 現実感消失症においては、自我境界へのリビドー備給が減少するために、自我境界を通して流入する対象に付与される現実感が、低下するのだと考えた

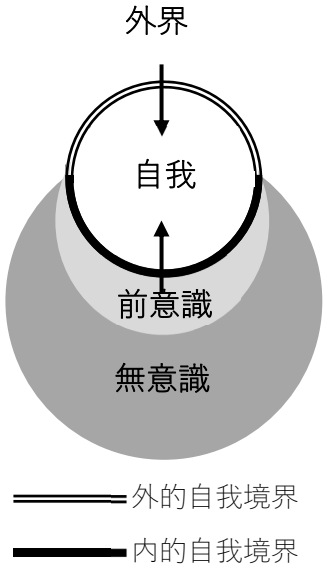
➢ 離人症においては、やはり自我境界へのリビドー備給が減少するために、通常は自我感情が付随している表象が、それを失うと考えた

- ➢ さらに極端に自我境界への備給が減少すると、内的表象と外的現実の区別が付かなくなり、幻覚や妄想が体験されるのだと考えた

○ フェダーン自身は、自らの理論を図示することはなかったが、左図はその「自我境界」の様子を、演者なりに図示してみたものである

- ➢ 自我は、自我境界を隔てて、外界と内界（前意識・無意識）に接している
- ➢ 外界からは外的自我境界を通して、内界からは内的自我境界を通して、様々な情報が自我に流入する

【図 1】自我境界の模式図



(3) 自我境界の変容としての解離

○ フェダーンは、離人症、現実感消失症、幻覚等を、「自我境界におけるリビドー備給の減少」によって説明したが、このうち離人症と現実感消失症は、現在はいずれも解離症状の一種として理解されており、また幻覚も、解離症状として出現しうる

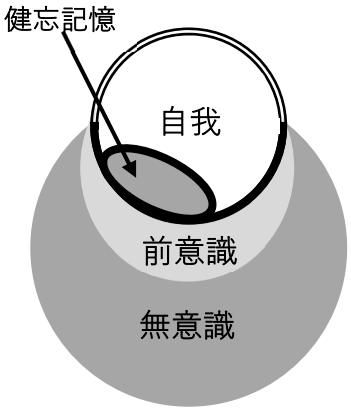
- ➢ すなわち、解離という現象は、自我境界の状態と何らかの関係があるのではないか？

○ 演者は、右記の症状にかぎらず、全ての解離症状は、「自我境界の変容」というモデルによって説明できると考えている

① 解離性健忘

- ◆ 解離性健忘においては、特定の記憶（しばしば外傷記憶）が、意識的に想起できなくなる
- ◆ 解離され想起できなくなっている記憶と意識との間の壁は「健忘障壁」と呼ばれるが、これは自我の到達可能な範囲の外縁をなしているわけであるから、フェダーンの言う自我境界と同等である

【図 2】解離性健忘



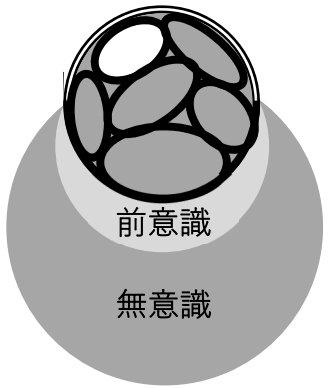
② 解離性同一症

- ◆ 解離性同一症（多重人格性障害）においては、一人の中に複数の人格が出現し、互いに別個の自我意識を持ち、別様の行動をとる
- ◆ 各人格を隔てる壁はやはり「健忘障壁」と呼ばれ、通常は各人格はお互いに他の人格の行動や意識内容を知らない

◆ ここでは、フェダーンの言う「自我の統一性」が多数出現しているわけであるから、自我境界も多数存在していることになり、下図のような状態が想定される

◆ 一つの人格は、他の人格の声を「内部からの声」として聞く場合もあれば、「外界からの声」として聞く場合もあるので、人格間を隔てる障壁は、内的自我境界的である場合と外的自我境界的である場合があるのかと思われる

【図 3】解離性同一症



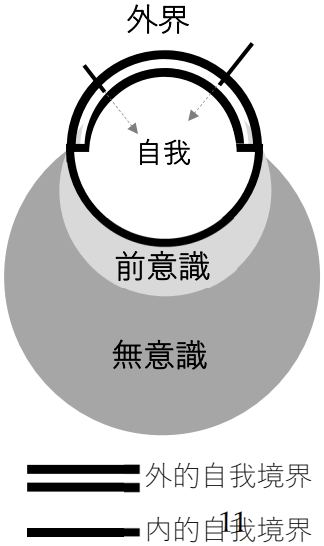
③ 現実感消失症

◆ 現実感消失症においては、知覚される外界の存在が現実感を失って、膜を通して隔てられているように感じたり、スクリーン上の映画のように平板に感じられたりする

◆ フェダーンは、現実感消失症においては、外的自我境界へのリビドー備給が減少するために、自我境界を通して流入する対象に付与される現実感が低下するのだと考えた

◆ 下図では、外的自我境界が硬く厚く変化して透過性が低下し、外界から自我に流入する刺戟が減弱して、生気を失っているものとして表している

【図 4】現実感消失症



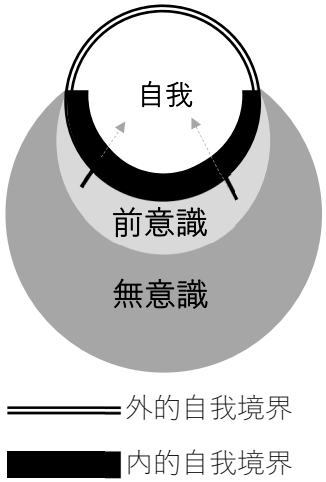
④ 離人症

◆ 離人症では、自己の思考や感情などの体験が、生き生きとした実感を失ってよそよそしく感じられる

◆ 下図では、内的自我境界が厚く硬く変化し透過性が低下し、内界から自我に流入する刺戟が減弱して、生気を失っているものとして表している

◆ フェダーンは、内的自我境界へのリビドー備給が減少するために、対象への自我感情の付与が不足するのだと考えていた

【図 5】離人症



○ 他の解離体験については、次節において賢治の作品に即して自我境界と関連づける

(4) 宮沢賢治の作品に描かれた種々の解離体験

○ 賢治が作品に描いている幻想的な体験の性質については、これまで種々の病跡学的研究が行われ、「直観像説」「躁うつ病説」「カリスマ症候群説」などが出されたが、どれもその体験内容をうまく説明するものではなかった

○ 柴山雅俊は、著書『解離性障害』において、これらの体験は、「表象幻視」「離人症」「気配過敏」「体外離脱体験」等の解離現象として理解できることを示した

➢ 多種多様な幻想的体験が、解離という機制によって包括的に説明できる

➢ また、口語詩に記された幻想的体験は、ほとんどが解離現象に該当することから、それらが恣意的な創作でなく賢治の実体験であったことが示唆される

○ 以下、賢治の記した解離体験を、自我境界の変容として図示し理解を試みる

① 気配過敏・被注察感

ブリキ缶がはらだゝしげにわれをにらむ、つめたき冬の夕方のこと。（歌稿〔B〕59）

西ぞらの黄金の一つめうらめしくわれをながめてつと沈むなり。（歌稿〔B〕69）

うしろよりにらむものありうしろよりわれらをにらむ青きものあり。（歌稿〔B〕79）

それはいゝがさ沼森めなぜ一体坊主なんぞになったのだ。えいぞっとする　気味の悪いやつだ。この草はな、この草はな、こぬかぐさ。風に吹かれて穂を出して烟って実に憐れに見えるぢゃないか。

なぜさうこっちをにらむのだ、うしろから。

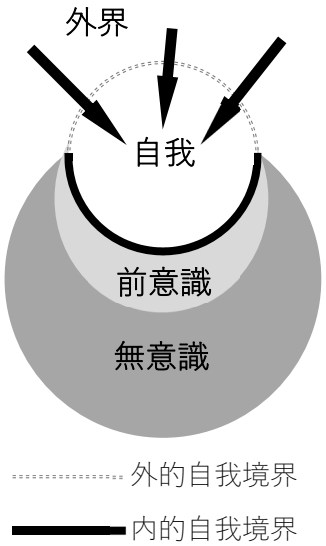
何も悪いことしないぢゃないか。まだにらむのか、勝手にしろ。

（「沼森」より）

◆ 下図では、外的自我境界が稀薄化して透過性が高まり、外界からの刺戟が過度に流入して、自我を脅かしている様子を表している

◆ この過剰な刺戟が、他者からの注察や敵意として感じられることがあると考えられる

【図 6】気配過敏・被注察感



② 近接化

近接化とは普段注意をあまり向けることのない意識の周辺に位置している外界の知覚、表象（記憶表象を含む）、体感などが過剰なイメージや実感を伴って主体に迫ってくる体験である。対象性をもつものがすべて自分を圧倒するものとして迫ってくるため、不安、恐怖、緊張、困惑を強く感じる。周囲の物が自分に向かって圧迫してくるとか、壁が自分に迫って来て部屋が小さくなったと感じることもある。

（柴山雅俊『解離の構造』より）

◆ 次の作品では、岩頸が不意に賢治の方に肉迫して「近接化」を呈していると考えられる

毒ヶ森
南昌山の一つらは
ふとおどりたちてわがぬかに来る。

（歌稿〔B〕165）

③ 離人症

ぼんやりと脳もからだも
うす白く
消え行くことの近くあるらし。

（歌稿〔B〕165）

われはなし。われはなし。われはなし。われはなし。すべてはわれにして、われと云はるゝものにしてわれにはあらず総ておのおのなり。われはあきらかなる手足を有てるごとし。いな。たしかにわれは手足をもてり。さまざまの速なる現象去来す。この舞台をわれと名づくるものは名づけよ。名づけられたるが故にはじめの様は異ならず。

（保阪嘉内あて書簡154より）

◆ ここで賢治は、自分の脳や身体や手足が存在するという実感をもてず、消滅しそうな感覚を覚えており、図示すると先の【図5】のようになる

④ 体外離脱体験

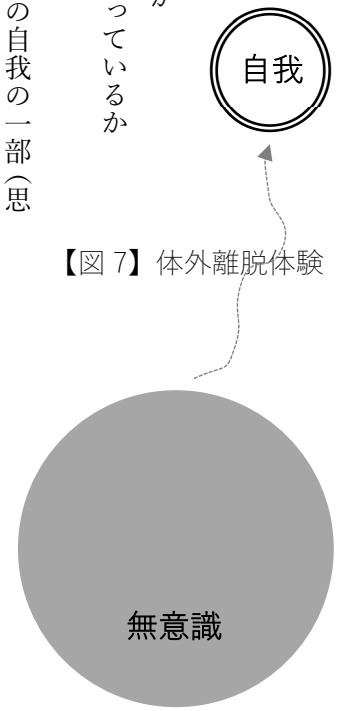
憤懣はいま疾にかはり
わたくしはたよりなく騰って
河谷のそらに横はる
しかも
水素よりも軽いので
ひかってはてなく青く
雨に生れることのできないのは
何といふいらだゝしさだ

（「囈語」）

◆ ここで賢治は、浮揚して空に昇り、雲のように漂うという、一種の「体外離脱体験」をしているように思える

◆ 「たよりなく」「水素よりも軽い」という描写からは、離人症も伴っているかもしれない

◆ 次の作品は、作者の自我の一部（思考）が、体外に流出するという体験を描いている（自我の部分的な「体外流出体験」）



【図 7】体外離脱体験

そら、ね、ごらん
むかふに霧にぬれてゐる
蕈のかたちのちいさな林があるだらう
あすこのとこへ
わたしのかんがへが
ずゐぶんはやく流れて行って
みんな
溶け込んでゐるのだよ
こゝいらはふきの花でいっぱいだ

（「林と思想」）

⑤　部分憑依

黒板は赤き傷受け雲垂れてうすくらき日をすすり泣くなり。

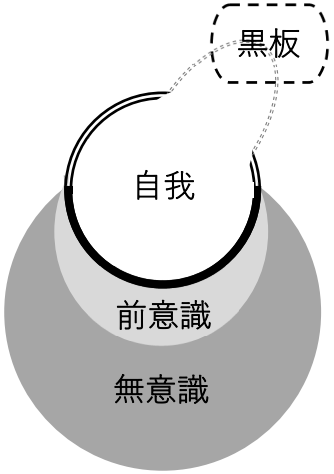
（歌稿〔B〕165）

◆ 黒板の「赤き傷」とは、教師が赤チョークで強く引いた線を指すが、ここで賢治は黒板に感情移入をするあまり渾然一体となって、傷を受けてすすり泣く主体は黒板なのか作者賢治なのか、区別が難しい状態になっている

◆ 佐藤通雅は、ここで賢治は短歌が本来持つべき「一人称詩」としての属性を逸脱して、特異な領域に踏み込んでいると考え、このような賢治短歌の特徴を、〈超一人称〉と呼んでいる

◆ ここでは、下図のように賢治の自我境界は黒板の方に膨張して、部分的に黒板と融合した結果、「賢治でもあり黒板でもある」主体が生まれ、この主体が痛みを感じ泣いているのである

【図 8】部分憑依



外的自我境界
内的自我境界

◆ 一般に、主体が別の対象に取って替わられる現象を「憑依」と呼ぶが、この短歌で作者は部分的に黒板に主体の座を明け渡し、黒板によって賢治が憑依されている（あるいは賢治によって黒板が憑依されている）とも言えることから、ここではこれを「部分憑依」と呼んでおく

⑥　解離性幻聴

◆ 賢治が「心象スケッチ」に出かけて体験した幻聴に関する、同僚教師の証言

宮沢さんは学校の農業実習が終ると、実習服のままの姿で、いつもの心象スケッチ集をポケットに入れて出て行く。どこに行くというあてもなく気のむくまま、足のすすむままに歩いていく。実習の疲れも忘れ、きのうは田圃のほとり、今日は野原というように思索の頭を下げながら静かに歩いていく姿が思い出される。

そして夕刻に学校に帰って来る。私はこのようなとき、いつもどこに行って来ましたかとたずねると、きょうは学校から程近い北万丁目付近の田圃を歩いて来ましたという。今日はどんなことをスケッチして来ましたかと聞くと次のようなことを話された。

田圃の畦道の一隅に大きな石塊が置かれてあるので不思議に思いました。畦の一隅に何故このような石が一つだけ置かれてあるかと疑い、この石には何んの文字も刻まれていないからその理由はわからない、何んの理由なしに自然に石塊一つだけある筈はない。これには何かの目じるしに置かれたに相違ないと考えた。その昔、この辺一帯が野原であったころ人畜類を埋葬したときの目じるしに置いたものに相違ない。また石の代りに松や杉を植えてある場所もある。こういうことを考えながらこの石塊の前に立って経を読み、跪座して瞑想にふけると、その石塊の下から微かな呻き声が聞えてくるのです。この声は仏教でいう餓鬼の声である。なお耳を澄ましていると、次第に凄じい声に変ってきました。それは食物の争奪の叫びごえであったと語った。

宮沢さんに「ガキ」の世界というものは私どもの感覚によって、とらえられる世界でありますかと問うた。宮沢さんはそれはできます、と答えた。この問題についてしばらく論じ合ったことがあった。宮沢さんは高僧伝の中から餓鬼に関しての実話を引証して話された。

（白藤慈秀『こぼれ話宮沢賢治』より）

◆ 賢治の口語詩には、幻聴をはじめさまざまな水準の主体の「語り」が登場するが、多くの場合に各々の主体は種々の「括弧」や「字下げ」を用いて、立体的に表記されているのが特徴である

◆ 左の例では、《二重括弧》の部分が幻聴と考えられ、賢治を揶揄する「魔」の声が聞こえた後、最後に「如来」の啓示が現れる

大てい月がこんなやうな暁ちかく
巻積雲にはいるとき……
《おいおい、あの顔いろは少し青かつたよ》
だまつてゐろ
おれのいもうとの死顔が
まつ青だらうが黒からうが
きさまにどう斯う云はれるか
〔中略〕
《もひとつきかせてあげやう
ね　じつさいね
あのときの眼は白かつたよ
すぐ瞑りかねてゐたよ》
まだいつてゐるのか
もうぢきよるはあけるのに
すべてあるがごとくにあり
かゞやくごとくにかがやくもの
おまへの武器やあらゆるものは
おまへにくらくおそろしく
まことはたのしくあかるいのだ
《みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない》
ああ　わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます

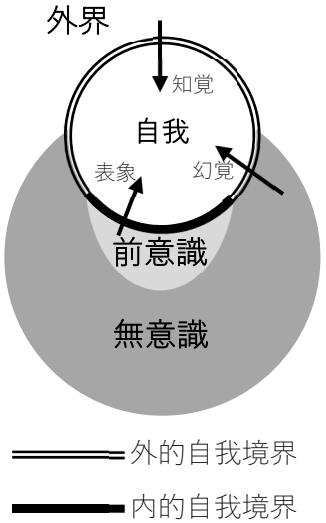
（「青森挽歌」より）

◆ フェダーンは、幻覚の発生機序として「自我境界の退縮」ということを考えたが、今回は解離性幻覚に関して下図のようなモデルを考えてみる

◆ ここでは、外的自我境界（二重線）が外界のみならず無意識の内部にも回り込んで接している

◆ 前意識から内的自我境界を通って自我に到達する対象は、自我感情を付与されて通常どおり自己の内界の「表象」として体験されるが、無意識から直接に外的自我境界を通って自我に到達する対象は、自我感情を伴わず「外的現実」として自我に体験されるため、これが「幻覚」になるのである

【図 9】解離性幻覚



⑦ 解離性幻視

すきとほるものが一列わたくしのあとからくる
ひかり　かすれ　またうたふやうに小さな胸を張り
またほのぼのとかゞやいてわらふ
みんなすあしのこどもらだ
ちらちら瓔珞もゆれてゐるし
めいめい遠くのうたのひとくさりづつ
緑金寂静のほのほをたもち
これらはあるひは天の鼓手、緊那羅のこどもら

（「小岩井農場」印刷形態より）

一体これは幻想なのか。
決して幻想ではないぞ。
透明なたましひの一列が
小岩井農場の日光の中を
調子をそろへてあるくこと
これがどうして偽だらう。
どうしてそれを反証する。
誰かがこれを感じない
それは向ふがまちがひだ
みんながこれを感じない
それはみんながわるいのだ。

（「小岩井農場」下書稿より）

◆ 「すあしのこどもら」の姿が自分に見えることについて、下書稿では「決して幻想ではないぞ」「誰かがこれを感じない／それは向ふがまちがひだ」として、自らの幻覚を正当化しようとしているように見えるが、このような記述はその後の推敲によって削られる

◆ 賢治は、この「天の童子」たちと何度か出会っていたようで、賢治にとって彼らは一種の Imaginary Companion と言うべき存在だったのかと思われる

・ 作品終盤では再び姿を見て、「ユリア、ペムペル、わたくしの遠いともだちよ」と呼びかけ、「きみたちとけふあふことができた」ことに感謝している

⑧ 世界合一体験

海の縞のやうに幾層ながれる山稜と
しづかにしづかにふくらみ沈む天末線
あゝ何もかももうみんな透明だ
雲が風と水と虚空と光と核の塵とでなりたつときに
風も水も地殻もまたわたくしもそれとひとしく組成され
じつにわたくしは水や風やそれらの核の一部分で
それをわたくしが感ずることは水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ

（「種山ヶ原」下書稿（一）より）

◆ ここでは、種山ヶ原の自然を構成する風、水、虚空、光、核の塵と、賢治を構成するやはり同じ物質が溶け合った結果、彼にとっては「水や光や風ぜんたいがわたくし」として、すなわち世界全体が自己と合一して体験されている

もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるひは惚として銀河系をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。

（宮沢清六あて書簡 212 より）

◆ このように、一種の神秘的恍惚状態において、自己自身と世界全体が渾然一体と溶け合うという体験は、古今東西において主に宗教的な法悦・脱自の境地として、様々な形で記録されてきた

それは私が自分の名前をひとりでひそかに繰り返して言っていると襲ってきましたが、すると突然、まるで個性意識の力がなくなってしまったかのように、個性そのものが溶け去って、果てしのない存在のなかへ消え去っていくのでした。そしてこれが決して混乱した状態ではなくて、実にはっきりとした状態、この上なく確実な状態で、まったく言語を絶しているのです。—そこでは死もほとんど笑うべき不可能事でありました—人格の喪失（もうしそうだったとしても）も、死滅ではなくて、唯一真実な生命であるように思えました。私は弱々しい描写しかできないのを恥ずかしく思います。でうから、その状態は言語に絶すると申したのです。

（W・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』より）

・ 神と人が一体化する「神人合一」や、古代インドの「梵我一如」も同様

◆ ロマン・ロランは、フロイトから著書『ある錯覚の未来』を贈られた礼状において、その理論に全体として賛同しながらも、宗教的感情の源泉は、多くの人が共有する右記のような無窮の主観的体験（これをロランは「大洋感情」と呼ぶ）にあるのだと、異論を述べた

◆ これに対してフロイトは、次著『文化の中の居心地の悪さ』において、ロランに次のように応答した

私が彼〔引用者注：ロマン・ロラン〕に、宗教は錯覚だと論じた小著を送ったところ、彼は、宗教に関するあなたの判断には全面的に納得するが、あなたが宗教性の本来の源泉を適切に評価していらっしゃらないのは残念だ、とする返信を寄こした。いわく、この源泉は、自分の思いをけっして去ることのない特別な感情であり、自分の知る範囲でも、他の多くの人々が同様の感情を持つと述べている。おそらく幾百万の人々にその感情があると決めてかかってよいのではないか。これは、自分が「永遠性」の感覚と名づけたい感情であり、何か無窮のもの、広大無辺のもの、いわば「大洋的」という感情なのだ。この感情は純粋に主観的な事実であり、教義などではない。

〔中略：この感情について考察するため、人間の乳児期からの自我の発達過程を述べた後に〕

このようにして自我は、自分を外界から引き離すわけである。もっと正確に言うなら、もともと自我はすべてを含んでいるのだが、後に外界を自分から排出する。つまり、われわれの今日の自我感情とは、かつての自我と環境とが密接に繋がっていたのに対応して、今よりも遙かに包括的であった感情、のみならず一切を包括していた感情が萎えしぼんだあとの残余にすぎない。仮にこうした本源的な自我感情が多くの人の心の生活において―規模の大小はあれ―なお存続していると想定してよいなら、この自我感情は、もっと細く鋭い境界線で区切られた成熟期の自我感情とは、一種の割符のように対をなして並び立つことだろう。また、こうした自我感情にふさわしい表象内容といえば、まさに私の友人が「大洋」感情を説明するのに用いたのと同じ、無窮、あるいは万物との一体感といった表象内容であろう。

（S・フロイト『文化の中の居心地悪さ』より）

- すなわち、この「大洋感情」あるいは「世界合一体験」においては、自我が「一切を包括していた」状態に戻るのであるから、自我境界は際限なく拡張して、世界全体と一致することになる
- この体験の図示を試みたのがこの頁全体で、自我境界は稀薄化するとともに世界全体を包むほどに拡大しようとしている

○ **以上見たように、宮沢賢治は多彩な解離的体験をしていたと思われるが、それは見方を変えれば、彼の自我境界が非常に柔軟で、伸縮自在に変転していた結果と考えることもできる**

(5) ハルトマンの「心的境界」

○ ハルトマン（Hartmann, Ernest）は「心的境界（boundaries in the mind）」という概念を提唱し、フェダーンの言う自我境界に概ね重なる「知覚の境界」や「意識と無意識の境界」のみならず、「思考と感情の境界」「覚醒と睡眠（あるいは夢）の境界」「記憶の境界」「身体や個人空間の境界」「対人境界」「自己同一性の境界」等を含めた多様な境界を総合的に扱い、これらの境界が薄いか／厚いかという特性は、パーソナリティの新たな次元として有用であると主張している

○ これは非常に多角的で適用範囲が広い概念である一方、かなり曖昧さも感じられるが、ハルトマンは各種境界の程度を総合的に測定するために、一四六項目から成る「境界尺度（Boudaries Questionnare）」を作成して、多数の被験者に施行した

○ その結果、各境界の薄い／厚いという程度はかなり相関しており、ハルトマンは全体に境界が薄い人を thin boundaries、厚い人を thick boundaries と呼んでいる

【図 10】世界合一体験

➢ 以下は、八六六名に対する境界尺度の施行結果から抽出された因子の例

◆ 「一次過程思考」：よく放心状態になる、自己同一性が変動する、イメージが現実と区別できないほど鮮明である、共感覚体験がある等、「薄い境界」と関連する項目

◆ 「子供との同一視」：自分を子供のように感じ、子供を好み、子供と遊ぶことを楽しむ等、「薄い境界」と関連する項目

◆ 「霊感者／透視者」：透視能力や人の心を見抜く力があるという信念、予知夢を見る、鮮明な記憶やイメージを体験する等、「薄い境界」と関連する項目

◆ 「信頼を持った開放性」：世界に対する開放性、他者を信頼する、個人的経験を開示する等、「薄い境界」と関連する項目

○ またハルトマンは、「境界の薄さ」は、共感性の高さや催眠感受性の高さ、さらに芸術性・創造性とも関連すると述べている

これらを見ると、宮沢賢治という人は、「境界の薄い人」の典型だったように思われる

(6) 賢治の対人境界と「〈みちづれ〉希求」の行方

○ 若い頃の宮沢賢治は、人生や宗教上の同伴者を強く求め、ジョバンニのように特定の人と「どこまでもどこまでも一緒に行かう」と願う傾向が顕著であった

➢ そのような対象の例として、高等農林学校からの親友保阪嘉内、妹トシ、農学校同僚の堀籠文之進が挙げられる

◆ しかし、保阪とは一九二一年に別れ、妹トシは一九二二年に夭折し、堀籠への思いは一九二二年の「小岩井農場」下書稿に縷々綴られた後、一九二三年に次のようにして諦めた

> 同僚堀籠文之進と一関へハイキング。途中一切英会話。一関で上演中の歌舞伎を見物し、10時を過ぎる。汽車もなく、飲み屋で休み、月夜を幸い帰る。
> 途中、たまたま信仰の話に及んだとき、「どうしてもあなたは私と一緒に歩んで行けませんか。わたくしとしてはどうにも耐えられない。では私もあきらめるから、あなたの身体を打たしてくれませんか」といい堀籠の背中を打った。
> 「ああこれでわたくしの気持ちがおさまりました。痛かったでしょう。許してください」といい、平泉駅につき待合室のベンチで休み、夜明けとともに下り列車に乗り、花巻まで一睡する。
> （『新校本宮澤賢治全集』第十六巻年譜篇より）

➢ 演者はこのような賢治独特の感情を、「無声慟哭」の「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」という言葉に倣い、「**〈みちづれ〉希求**」と呼んでいる

○ 賢治の「〈みちづれ〉希求」は、右の例のようにかなり一途で一方的なものだったため、後世になると保阪や堀籠への感情は同性愛だったとか、妹への感情は近親性愛だったとか言われることもある

➢ しかし演者としては、これは賢治の「対人境界の薄さ」＝主観的な対人距離の近さに伴って、相手との一体性を過剰に求めてしまう感情であり、少なくとも右の三人に関しては、性愛的なものとは言えないと考える

「あなたですか、さっきから霧の中やらでお歌ひになった方は。」
「えゝ、私です。又あなたです。なぜなら私といふものも又あなたが感じてゐるのですから。」
「さうです、ありがたう、私です、又あなたです。なぜなら私といふものも又あなたの中にあるのですから。」

（「マグノリアの木」より）

○〈みちづれ〉として求めたこの三人への思いはかなわず、深い孤独感を抱いた賢治は、「個人」に対する執着が自分の誤りであったと考え、代わりに「万象」を〈みちづれ〉として、「至上福しにいたらうとする」道を目ざす

この不可思議な大きな心象宙宇のなかで
もしも正しいねがひに燃えて
じぶんとひとと万象といつしよに
至上福しにいたらうとする
それをある宗教情操とするならば
そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする
この変態を恋愛といふ
そしてどこまでもその方向では
決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を
むりにもごまかし求め得やうとする
この傾向を性慾といふ

（「小岩井農應」より）

○「農民芸術概論綱要」に記された、「われら」および世界・銀河・宇宙との一体化の希求も、このような認識の延長にあるものと思われる

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである
まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう
われらに要るものは銀河を包む透明な意志　巨きな力と熱である

（「農民芸術概論綱要」より）

○賢治にとっては、自分自身が銀河や宇宙と一体化し溶け合うのは自明の感覚であり、そしてまた人々も、「個人から集団社会宇宙と次第に進化」して、全てを包摂するような「われら」となるはずであった

➢ ただ、実際に農村に飛び込んでみると、若者や農民とともに、右のような意味で「われら」と呼べる一体性を築くのは容易ではなかった

○その苦難の体験が、若い頃の幻想性とはまた異なった深さを、彼の後半生の作品に与えるのであるが、それは本日の演題とはまた別の話である

以上見たように、宮沢賢治という人は、生来の素質として「境界の薄い人」であり、これに伴って共感性や空想傾向も高く、また童話に表れているように人間／動植物／無生物の間の境界も薄く、さらに自我境界の薄さから解離的な幻想体験もしばしば経験していたと考えられる（先天的要因）

このような特質が、Ｉで述べた「心象スケッチ」という方法の実践によって（なかば意識的に）増幅され、その作品に独特の幻想性を与えたのだろうと思われる（後天的要因）

【心理学・精神医学関連参照文献】

柴山雅俊：『解離性障害―「うしろに誰かいる」の精神病理』ちくま新書、二〇〇四

柴山雅俊：『解離の構造　私の変容と〈むすび〉の治療論』岩崎学術出版社、二〇一〇

岡田斉、松岡和生、轟知佳：「質問紙による空想傾向の測定　Creative Experience Questionnare 日本語版（CEQ-J）の作成」（『人間科学研究』第26号、二〇〇四）

Federn P: "Ego Psychology and the Psychoses" Imago Publishing Co Ltd, 1953

フロイト・S：『文化の中の居心地悪さ』（嶺秀樹 高田珠樹訳『フロイト全集第20巻』岩波書店、二〇一一）

Hartmann, E: "Boundaries in the Mind: A New Psychology of Personality" Basic Books, 1991

児玉恵美：「日本版境界尺度（JBQ）の作成および精神病理・創造性との関連の検討」（『応用障害心理学研究』第12号、二〇一三）